
xxx in a case

慈雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

x x x i n a c a s e

【Nコード】

N 1 4 3 5 Y

【作者名】

慈雨

【あらすじ】

二人が出会うその日。

恋とは、硝子ケースに入れて遠目から鑑賞すべきものだ。

市内で一番大きな本屋、その奥の奥。平積みにされたその文庫本の前で、私は一つ溜息をついた。

手に取ったその文庫本。美しい男の子二人がシャツをはだけさせたその表紙を破り捨てたい衝動に駆られながら、私はそそくさとレジへ足を向ける。

少女マンガの羅列された棚の前で嬌声を上げる女の子達を見かけた。

レジに立つ女の子は、私をちらりと見遣って刹那眉を顰め、淡々と自分の仕事をすすめる。

肩まで伸びた髪を栗色に染めた、若い、今時の女の子。高校生か大学生だろうか、顔立ちは中々可愛い。

しかし金を受け取り、黙々と紙袋に本を入れるその表情は皆無だ。

つまらなそうにすら見える。

十年ほど前の私も、この子のようにつまらない表情で日々を過ごしていたのだろうか。

それは勿体無い気がする。まあ日々がつまらないのは、その頃も今も、そしてこれからも変わらないだろうけど。

差し出されたおつりを受け取り、私は彼女に微笑んでみた。

「私ね、この本の作者なんです」

女の子が目を丸くするのを見届けて、私はその本屋を出る。

コンビニでおにぎりといつもの煙草を買い、マンションの五階を指した。

エレベーターのあの、胃が持ち上げられる感触がどうも苦手で、毎回ふうふうと息を吐き出しながら階段を上がる。

もういい歳だし、でも、だからこそ少しでも運動をしておいた方がいいような。

そういう考えが巡るうちにたどり着いたよく知った風景は、いつもとは少々違っていた。

階段とエレベーターから一番離れたそこ、つまり私の部屋の更に奥には、ちよっとした屋上が設けられている。

何を意図しているのかはわからないが、古ぼけた白いベンチが一つ置かれているそこに、今日は小さな手帳が置かれていた。

忘れ物だろうか、興味本位で歩み寄り手に取ってみる。ベンチの脇、枯れかけた観葉植物が風でカサカサと鳴っていた。

学生証だった。徒歩十五分ほどの場所にある進学校の学生証。

ご丁寧に持ち主の名前と住所、更には顔写真まで載せられていたのだが、私の興味はすぐに別のものに移る。

写真。学生証に貼られたそれとは違う、パーカーを着た男の子の

写真。

教室の机の上に座り、楽しそうに笑っている写真。隣のに居るのだろう人物を指差して笑う写真。

手を叩いて笑う写真。

計三枚の写真はどれも、一人の男の子がはちきれんばかりの笑顔で写っているのだが、

布や指の影のようなものや制服を着た背中などが写り込んでおり、明らかに盗撮されたものだ。

もう一度学生証に貼られた小さな写真を見る。

そこに写るのはパーカーの少年ではない。薄い唇をきゅっと結んだ仏頂面が写っている。

私はその顔に見覚えがあった。屋上の古ぼけたベンチに時々座っていた人物。

そうだ。

時々ここにやってくる、綺麗な顔の男の子だ。

私はふと考えを巡らせる。

自分の中でカチリとスイッチ音が響き、仕事中のソレに切り替わる。私の妄想が正しければ、これはきっとそういう事で。

見つけたと、直感が告げる。

数十分前の私は仕事に詰まっていた。

言葉が選べない、文章を連ねる事ができない、所謂スランプという奴だ。

気分転換にと本屋に出向き、平積みされていたデビュー作を一冊だ

け回収し

店員の女の子に素性を明かすという意味の解らない事をしてみたり。反動だろうか、湧き上がる欲に笑みさえ零れる。

勘違いかもしれない。 そうだとしたら何と失礼な話なのだろう。 そう思いながら、私の憶測は間違えていないと、妙な自信がある。 知りたい、書きたい、知らしめたい。

湧き上がるその欲は、恋にとても良く似ていた。

夕食時を狙って持ち主の元に向かう。 一つ下の四階。

炒め物をしているのだろうか、香ばしい匂いに空腹を覚える。

少女漫画に嬌声を上げる女の子、つまらなそうなアルバイト、大笑いするパーカー少年、そして学生証の仏頂面。

本屋に寄り道をして、級友をそっと隠し撮りして、そしておそらく、恋に焦がれて。

彼らは何を思うのだろうか。 先に歳を重ねた私は、残念ながらその感触をすっかり忘れてしまった。

恋とは常に形を変え、些細なきっかけで唐突に破裂する水風船のようなものだと思っている。

私はそれを遠巻きに眺め、書き記すことで給金を貰っている。 満足している。

だから知りたい。

渦中で今もそれを膨らませる彼は何を思うのか。

インターフォンを鳴らせば、出てきたのは学生証の写真と同じ顔。 僅かに眉を寄せている。 私は微笑んで、そして手の中のそれを差し出した。

「くんばんは。 508号室の者ですけど」

人間誰しも、傷つきたくはないでしょう。

赤い血が滴り脳内を熱するその痛みを、私は知っている。

陳腐なイラストは要らない。文字さえあれば素敵な夢を提供してあげる、だから。

その硝子ケースに、お手を触れないで下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1435y/>

xxx in a case

2011年11月2日02時04分発行